

# 夢は駆ける

馬産地遠野は、生産者たちの果てない夢で支えられてきた。幼いころからの夢や、馬の魅力に引き寄せられ、夢や希望に向かって日々奮闘する人々に迫る



学校でも馬との触れ合いができれば

岩間<sup>たかし</sup>敬さん(31)=松崎町=

高校3年の秋、通学路の途中にある乗馬スクールで初めて馬に乗って以来すっかり「馬のとりこ」になった。高校卒業後、建築関係の専門学校に入学したものの、馬への夢を捨てきれず馬にかかわる仕事に就いた。

22歳で遠野に帰省してからは、遠野に伝わる地駄曳きを学んだり、馬糞を堆肥に使った循環農法で栽培したお米「馬米」を生産したりするなど、馬を活用した新たな発想に取り組んできた岩間敬さん。

「馬は僕の想像力を豊かにしてくれただけでなく、数々のすばらしい出会いを与えてくれました。今の僕があるのは馬のおかげです」と話す。

現在は、附馬牛町の馬付住宅のスタッフとして、馬や農地、施設の管理に汗を流す毎日。仕事柄、全国各地から訪れる観光客などと接することが多い。中には、馬との触れ合いを楽しみに訪れる人もいるという。

「遠野の人にとっては見慣れた環境も、外から来る人たちにはとても魅力や価値がある場所。大切にしなければならぬもの」と話す。その上で、「遠野の小・中学生はみんな『馬との触れ合い』授業があつていい。机の上の勉強では得られない大切なことや、魅力にきつと気付くはずですよ」と遠野の将来像に力を込める。

岩間さんにとつての馬の存在を問うと「例えるなら愛車のようなもの。それぞれ能力や特性が違い、100頭いれば100通りの夢が実現できる」と屈託のない笑顔で話す。若者の新たな発想が、馬産地遠野の未来を支える。

多くの人に興味を持ってもらいたい

菊池<sup>まさみつ</sup>政光さん(28)=松崎町=



「二頭のうち一頭買うから見てこい。」とお父さんに言われ、これでどうとうほくの馬が買えるんだと、ワクワクするような、ちよつとこわいような気持ちで、馬屋に走っていききました」

平成3年3月に発刊された雑誌「ホースメイト」第4号の読者ページに、小学3年生の男の子が、念願だった馬を購入したうれしい気持ちが描かれた作文が掲載されている。

お小遣いを貯めて、念願の愛馬を手に入れた少年は、菊池政光さん。今、遠野で唯一の装蹄師として活躍している。自分の体重の2倍以上ある馬の足を自分のまたに挟み、手際よく蹄の手

入れをする。「蹄なくして馬はなし」と言われるほど、馬にとつて蹄の手入れは重要だ。

「装蹄には、けがからの保護と、馬の能力向上の役割があります。しかし、人間と同じで、馬も一頭一頭体のつくりや性格も違うので、これが一番いいというやり方はありません。そこが難しいところですよ」と話す。

祖父から続く馬生産者の家庭に生まれた。自宅は今も曲り家の形を残し、馬の声や息づかいを常に感じながら、馬も家族の一員として成長してきた。高校卒業後の進路は迷わず「馬にかかわる仕事」を志し、毎年16人しか入校することができない栃木県にある日本

で唯一の装蹄師養成所に合格。夢への一歩を踏み出した。

まだ二十代。高齢化が進む市内の馬生産者の中にあつて、政光さんのような若手は貴重な存在だ。

「馬産地遠野としての歴史や文化があつても、それが受け継がなければいつかは廃れてしまうもの。生産者や関係者だけの歴史や文化にせず、もっと多くの人に馬に興味を持ってもらえたら」と話す。

「これから描く夢は、いくつになつても馬とかかわり続けること」と政光さん。遠野の馬文化の若き継承者の一人として、今日もたくさん馬たちの足を支え続ける。